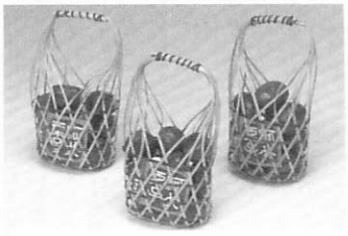
FAME Report

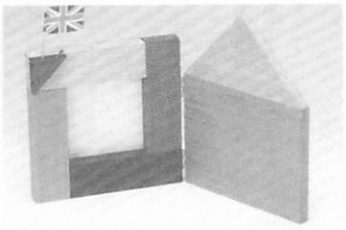
京都ノゾキ見トピックス

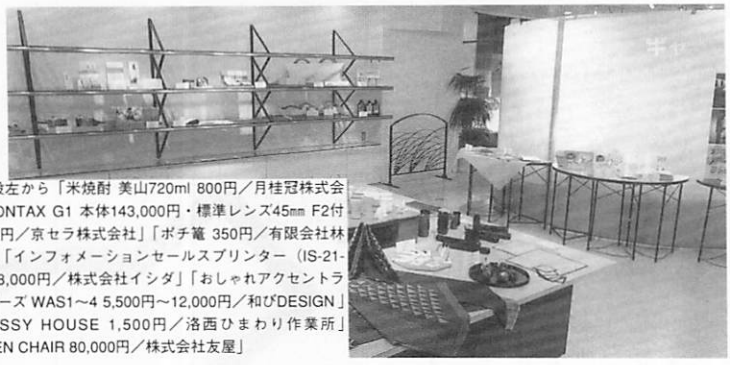
京都ブランドの新顔&旧顔あれこれ。

レントゲン撮影機器や自転車まで。伝統工芸品ばかりが京都ブランドやない、新しいMade in KYOTO商品が、一堂に集合。

取材・文／今江ユリ　撮影／内藤貞保（会場のみ）







写真上段左から「米焼酎 美山720ml 800円／月桂冠株式会社」「CONTAX G1 本体143,000円・標準レンズ45mm F2付180,000円／京セラ株式会社」「ポチ箒 350円／有限会社林万昌堂」「インフォメーションセールスプリンター（IS-21-N1）698,000円／株式会社イシダ」「おしゃれアクセントライトシリーズ WAS1～4 5,500円～12,000円／和びDESIGN」「ENBASSY HOUSE 1,500円／洛西ひまわり作業所」「PYUSEN CHAIR 80,000円／株式会社友屋」

京都ブランドと聞いて、まず何を思い浮かべるだろうか？　京野菜、着物や和装小物、和菓子…etc。

間違いではないが、いつまでもそれらのものしか思い浮かばなければ京都人間・失格（？）だ。

去る3月9日～19日、祇園の京都クラフトセンターで開催された『'95Made in KYOTO京都デザイン優品選定商品展』に、京都ブランドの様々な商品が結集。観光客や地元人に、その優れたセンスや性能をアピールした。

平成元年より始まったこの企画。当初はコンペ形式で、ベストデザイン商品の選定により、地元企業間のデザイン開発意欲を喚起させる目的で催されていたが、昨年より審査委員とは別に推薦委員制度を導入。推薦委員に選ばれた面々は、建築家の若林広幸氏、京都芸術短期大学教授の久谷政樹氏、（協）京都クラフトセンター理事の中西まゆみ氏、陶芸家の小川長楽氏、（株）井筒八橋本舗代表取締役の津田佐兵衛氏ら、地元の有識者、企業の方々など18名が参加し、それによって選定される商品にも幅が出たという。

また、今まで選定は新製品のみに限定されていたところを、昨年より古くからあり、京都っ子の間で親しまれている定番商品も対象に加わり、温故知新の精神で未来の京都デザイン優品に繋がるアイデアを発見しようといった試みもなされている点が見モノだった。

会場に足を踏み入れれば、商品のパッケージデザイン、工芸品、和のテイストを生かした照明器具やインテリア類、食器など、いかにも京風といった製品がずらり。

珍しいところでは業務用に使われる電子天びん、カメラ、コンパクトpHメーターといったハイテク機器類が。大きなところでは仏壇、レントゲン撮影機器や自転車、スライド式駐輪装置まで展示されており、改めて“ハイテクに強い京都”を実感した。

さらに、定番商品の中では焼栗で有名な老舗のパッケージ、老舗化粧品店の自家製油とり紙などおなじみの商品が並び、見物客の中から「あ、知ってる知ってる」とか、「えっ、これも京都ブランドなの?!」とびっくりしたりと、様々な反応を示していた。

その他染めの小物類などは会場販売も行なっており、そちらの方も観光客を中心に売れ行きは上々とのことだ。

今年の選定にあたって申請された商品の数は275品。内、みごと選ばれた商品が79品。この数からわかるように、京都デザイン優品に選ばれることは、並大抵のことをしていてはできない、ということがうかがえる。

「全国規模で商業デザイン展はあるが、地方単位でのそれはまだまだ。今後も審査委員の方々から意見を聞きながら同展を発展させたいと思う」と語るのは、京都府商工ぶ染色・工芸課の冨山貴史氏。他府県人はもちろん、地元京都っ子が見ても新鮮な驚きと意外な発見がある京都デザイン優品選定展。今後の展開に期待大である。